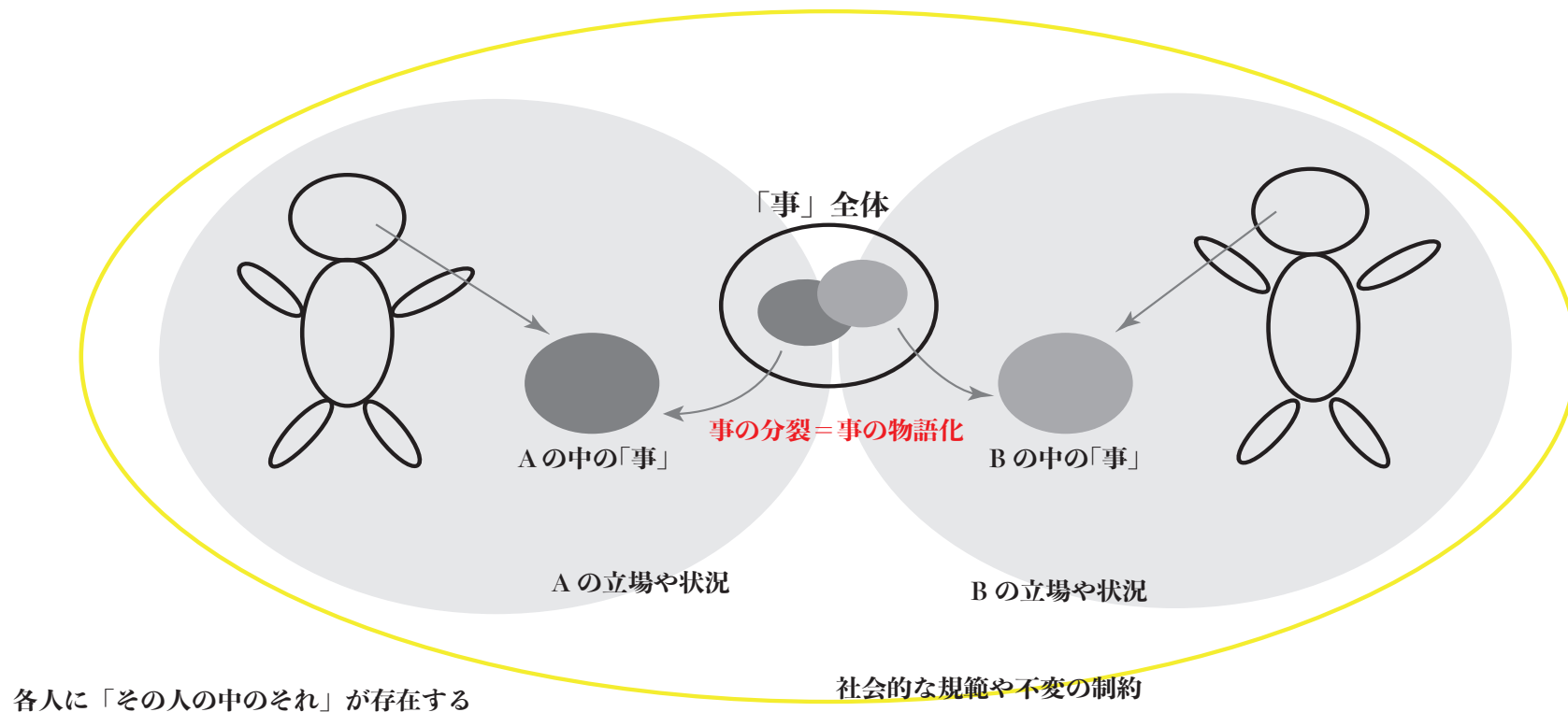


視線の非対称性

視線の非対称性

私たちは、なぜ“すれ違う”のだろうか。私たちは、同じ事象を見つめる時、その複雑性に包まれた「事」を各人が異なる方向や強さでフォーカスする。この“単純化”のプロセスは、しばしば表裏一体で善悪がつけられない「事」から、特定の側面を切り取り、「分かる／分からない」「できる／できない」といった二項対立を生成する。

その結果、フォーカスによってルート付けされた「事」、すなわち、物語化された「それ」は、時に力を持ち、他者を傷つける。誰も「事」の全体を見通すことができない以上、私が理解する「それ」とは、世界そのものではなく、常に「私の中にあるそれ」である。そこにこそ、私たちが解明を試みるべき実存的な分断と苦悩の種が潜んでいるのではないのだろうか。



あるプロジェクトを進める中で感じた、すれ違い・分断の構造を分析し、一つのモデルとして提示する。

「事」全体：中央にある「事」は、**複雑性**（善悪を単純に決められない多層性）を持っている。

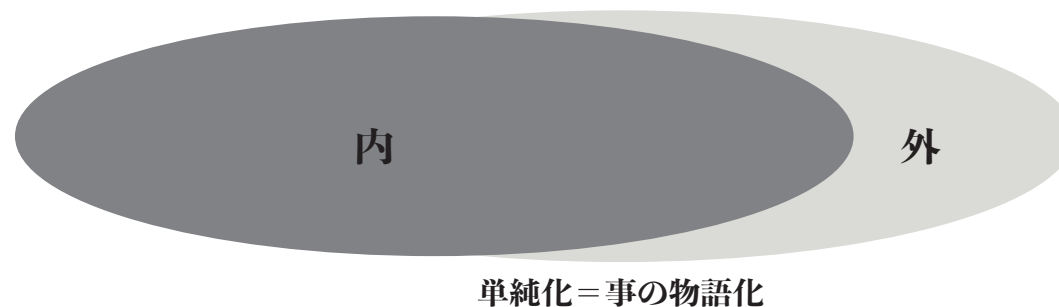
事の分裂＝物語化：人物 A と B は、それぞれ自身の「立場や状況」などの**フィルター（視線）**を通して「事」を見る。この視線が、「事」の一側面のみを切り取る「**単純化**」が起きる。すると、「事」は A にとっては「A 中の『事』」、B にとっては「B 中の『事』」という、**異なる物語へと分断**される。

すれ違いの原因の分析：同じ「事」を見て、同じ目標を目指していても、A と B が認識している「事」はすでに**別の物語**である。この物語化された認知の非対称性が、「分かる／分からない」「内／外」といった二項対立的なすれ違いを生み出すのではないだろうか。

冷静さ：不安や焦りの中で**感情的な意思決定を行わない冷静さ**が必要であると感じた。

共存について：人と自分は本質的に視点が違い、完全に分かりあうことはできないという前提を引き受けた上で、**多角的な視点で出来事を見つめることが重要**であるとする。単純化・物語化のプロセスによって二項対立で排除する行為には、**大きな暴力性**があることを忘れてはならないと思う。

この単純化・物語化の構造は、個人レベルに限定されず、より大きな社会構造において同様に働いている場合が多いと感じた。この構造は、いじめ、外国人排斥、ジェンダー問題など、社会の多くの分断においても繋がっているのではないだろうか。



授業から学んだ視座

第1回 イン트로ダクション：宮沢賢治とディープエコロジー

視点の二重性：当事者としての感情（主観性）と、その背後にある構造を想像する客観性（構造的な視点）を往来する。

「見る」ことの変容：視覚の正統性を支えつつ、その土台を掘り崩す。目に見える範囲を超えて存在する世界を「どう見るか」という倫理を問う。

第2回 黒田菜月さん：実存と構造のバランス

バランス感覚：自分が感じること（実存）と全体を俯瞰する視点（構造）のどちらかに偏らず、その間にある「どうにもならなさ」から少しでも良い方向を探るための多角的な視点を持つ。

第4回 マヤ・エリン・マスダさん：実存からのリサーチ

状況に置かれた知（Situating Knowledge）：ラベルや制度といった外的な枠組みではなく、生きることで逃れられない経験や、その緊張感の中から生まれる感性を作品へと昇華させる。

視線の部分性：「あなたは何も見えていない」という出来事の語り得なさを内包し、自身の視点に限界があることを認める倫理観を作品に取り入れる。

➡ 二項対立を超える・個人的な背景から普遍性へ

物語化（単純化）され、「言葉」によって切り刻まれた「割り切れなさ」に対し、芸術は「言葉以前の言えなさ」を抱えたまま境界線を溶かしていくメディアであると再確認した。

作品制作において大切にしたこと

- 1: 「私の中の『それ』しか分らない」 自分の理解は、自身の背景を由来するため、常に「私の中にあるそれ」であることを自覚する。
- 2: 「異なる『見え方』を想像する」 自分には聞こえていない他者の物語への想像力を働かせる。
- 3: 「分らないものを考え続ける」 すぐに分かった気にならず、見えない全体の構造を想像し続ける実践。

➡ 単なる分析（解明）で終わらせるのではなく、スッキリしない「どうにもならないもどかしさ」を身体的に体験し、他者との差異に「折り合い」をつける場を提示したいと考えた。